



川の中の美しい島・輪中

評者 清田透

(論説委員会委員長)

「輪中集落」といえば、岐阜や愛知の濃尾平野を思い出す。川の氾濫による水害から地域を守るため、堤防で囲んだ集落を言う。大分県内にも大分市東部の高田地区に、通称「高田輪中」と呼ばれる同様の地域がある。

大野川下流で分流する乙津川との間に挟まれる中州にある。昔から何度も水害に襲われた。南北2・7キロ、東西1・4キロほど、楽器の琵琶の形に似ていることから琵琶の州とも呼ばれた。

今も旧集落部で家をかさ上げする石垣住居が見られ、石垣が続く迷路のような道は人々が築き上げた歴史を感じさせる。地域を歩いた著者は、いかにも「輪中らしい」美しい景観に魅せられ、以来、高田詣でが続いた。著者は高校教諭(地理歴史)である。高校の郷土史研究部顧問を務め、当初、高田地区には生徒とともに入り調査した。

長野浩典 著

川の中の美しい島・輪中

生徒は「クネ」と呼ばれる防水林の役割や、石垣の石が佐賀関や吉野(大分市)から運ばれたことを知った。その成果は奈良大学主催の全国高校生歴史フォーラムで4回発表し、うち3回で優秀賞などを受賞している。

その後、自らの研究を深め、景観から入った関心は人々の水害との戦いと絆、高田地区が持つ多種多様な歴史へと広がった。本書では中世以来の「高田鍛冶」と呼ばれた伝統の鍛冶集団や、江戸時代の熊本藩時代の行政、幕末に活躍した思想家・毛利空桑と近代、さらにはキリシタン時代の布教と殉教なども項目を掲げてまとめている。

なぜ人々は水害に遭いながらも、高田輪中に住み続けたのか。著者は吉本隆明氏が東京・佃島を詠んだ詩を紹介しながら、人々は輪中を「誓」のように思っていたのでは、と推測する。

水害を克服してきた高田の歴史は、多くの県民にもぜひ知ってほしい。本書は同地の多様な歴史も踏まえた物語、好ガイドブックともいえよう。日本近代史の研究者である。これまでに「放浪・廻遊民と日本の近代」や「西南戦争 民衆の記」などを発刊している。

(弦書房・2200円)

水害と人々の絆の物語

英社会と結び付く活

評者 暮沢剛己

(東京工科大教授)

「あのバンクシーの作品かもしれない」。本書の冒頭には、2019年初頭に大きな反響を呼んだ小池百合子東京都知事のツイッター上の発言が引用されている。あのバンクシーとは、もちろん最近日本でも注目されている「アート・テロリスト」という異名の持ち主のこと。この導入には何とも関心を刺激される。

英国の地方都市ブリストルでグラフィティ作家としてのキャリアを重ねたバンクシーは、その後ロンドンに拠点を移してさまざまな活動を展開し、今や大型プロジェクトによって世界的な注目を集めるようになった。

他にも反権威的なグラフィティ作家が大勢いる中で、なぜバンクシーは絶対的な存在になり得たのか、またこれだけ有名になった今もお、なぜ正体不明のままでもいられるのか。本書でバンクシーの足跡をたどった読者

毛利嘉孝 著

バンクシー

の多くは、つこの疑問 著者に、現代アートのチャーとく持ち、のバンクを有しつつ、イア戦略。他方正体を知されるが、正体不明でいたいく共有さだ。

いずれの活ツト(英脱)「で英国社会ると言えの回答にグロー、現在もバしい毀譽る。著者のだが、席上で自1で裁断におけるがってしドには、和感を隠しかし今もネスフにこだを想起し市の嫌わるネズミンクシーンクシー書・10



2020.3.15(日)大分合同